

学燈を護り伝えて40年

本学が、1950年4月に「鹿児島県立大学短期大学部」として誕生してからすでに40年を閲した。人ならば不惑などと、人生80年時代の尺度に合わないことは言わない。抵抗の年齢にまでも充分な時間を残す。正に壮年期である。今ひとしきりの試行錯誤を経て、やがて結実に至る道程にあると言えよう。

その道標とすべく『商経論叢』開学40周記念記念号を刊行する運びとなった。昨秋、記念式典に合わせて上梓された『鹿児島県立短期大学四十周年記念誌』に拠れば、本学商経科は開学早々の1952年1月に、研究・教育の模索と成果を世に問う学術誌『商経論叢』第1号を発刊しており、今回の記念号で恰も第40号を数える。重ね重ねの慶賀の念と同時に、先輩諸先生方によって高く掲げられて来た学燈を護り継ぐ責任の重さをひしと痛感せざるを得ない。

おりから、世界史の状況は激動と混乱を続けて止まない。社会科学、すなわち我々の「経済諸科学及び法学」にとっての環境・条件は、必ずしも良好とは言えない。分野によっては受難の時代とさえ言えよう。何か、「崩壊感覚」ともいうべきものが、我々の世界観の基底を浸しており、逸脱と没論理が、世紀末の冥闇をおどろおどろしく罷り通る態が見られるからである。

しかし、社会科学の原点を顧みれば、暗いカオスの中で我々を拠って立たせるのは、現象的理解を越えた本質的認識だけである。つまり、我々が「崩壊」の本質と、それが様々に提起する問題にアプローチし得るのは社会科学的認識に正しく拠ってのみではなかろうかと言うことである。

「大学」がルネッサンス以来、担って来た使命やレーゾン・デートルについては、今更に言うまでもない。端的には、それは現象を越えた本質的なものの解明であった。であればこそ、ミネルヴァの梟は夕暮になってはじめて飛翔したのである。しかし、今や必ずしも夕さを待てない。我々は白昼に、現象の変転に眩惑されることなく本質を見究めねばならない。

『論叢』の一層の充実と「学会」の更なる発展を期して巻頭の言を措く。

1991年2月

商経学会会長 橋 口 幸 夫